
ONE PIECE ～地味にひそかにおだやかに・改～

壱円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 〈地味にひそかにおだやかに・改〉

【Nコード】

N5218M

【作者名】

壱円

【あらすじ】

ルフィ兄に転生。その後、平凡で地味で穏やかな暮らしを目指す
が、トラブル体質なのかいろいろ目立ってしまう。悪魔の実なしでもやればなんでもできる…そんな唐辛子のように（主人公にとっては）カライ物語。

※この物語は物凄く長いので始めのうちは展開が遅いです。
ついでにEDから書きあげてしまったため、話は色んな「話」からはじまるので飛び飛びで進みます。

全部で125話を想定しています。このことを踏まえたとえ、それでもいいという方のみお読みください。

都会の空の下でひとつは蒼を求む (7/12) (前書き)

今回は長くなるのでポツになった第零章から追加!!

壱円の新しい覚悟にお付き合いくださりありがとうございます。

心機一転したこの物語は「地味な話」で「長編」であることを第一に宣言します。

それが耐えられない方には、つまらない話となると思うのでご注意ください。

耐えられるという方は長い旅路となりますが、しばしばお時間をいただきたく……よろしく願います。

都会の空の下でひとつは蒼を求む (7/12)

都会のどこかで

その空を見上げるひとがいた――

空を見上げるのは癖だった

それは夏休みに田舎のばあちゃんの家に行ったとき見た青い青い空を、この都会の中に探していたからだと思う

都会の空は灰色で、それでも人は自分たちで定めたレールの上を歩いて行く

とくにオレが生まれた国では、それが当たり前だった
どこまで続くのか

わかっているようで、わかっていない道
ただどそのレールからでることは『異質』とみられたから、“みんな”といれるように、不安定な平均台の上を歩き続けた

一生懸命両手を広げて

せまい平均台の上をやじろべえのようにグラグラ歩く

そのレールがとても細いと気付かず、人々はするすると歩いて行く
だけどオレは細さに気付いてしまったため、両手でバランスを取ら
ないと歩けない

下を見るとあまりの細さに落ちてしまいそうで…
上を見て歩く

都会の空に色はない

ドイ穴化の田んぼばかりが広がる場所で、幼いころに見た あの大
いほどの『青色』は――

記憶の中で

オレの知っている目の前で

霞んで薄れている

摩天楼のようなビルに阻まれて空の広さはわからない

わかるのは、空の高さだけ

――だから

心のどこかでもとめていたんだろう

太陽さえも

夜の月にさえも

なににも負けない

空さえも取り込むような

そんな青さを――

・ ・ ・
み つ け た

それからいつもみる空の色を映した世界に
空に匹敵する深い『蒼』をみるたびに笑いかける

都会の空の下でひとは蒼を求む (7/12) (後書き)

リースの続きが気になるといってくれたたくさんの方々に捧げます

設定 (2/7)

※物語と共に増えます

【モンキー・D・リース】

- ・ 5月1日生まれ（原作開始22年前）
- ・ 黒髪
- ・ 黒目
- ・ 一人称「オレ」
- ・ 零章ではまっとうに話せずに終わる
- ・ UFOと正面衝突し転生した
- ・ 前世の記憶がある
- ・ 生まれながらに自我を持つ赤ん坊
- ・ 原作知識はとびとびにあり
- ・ 特殊能力、一切なし
- ・ 運がとことんないが、強運の持ち主
- ・ 赤ん坊時代はひたすらどうやって生き抜こうか考えている

【モンキー・D・ガープ】

- ・ リースの祖父
- ・ 初孫自慢したいお年頃
- ・ 次こそは女の子であることを望む
- ・ かなりの確立で人の話を聞いていない（リースはまだ話せないの
でそれもしかたがないともいえる）
- ・ リースが誕生した頃はまだ髪の毛も髭も黒かった

【No Name】捏造キャラ

- ・ リースの母
- ・ 優しい、穏やか
- ・ 綺麗な声
- ・ あったかい

01. ある日終わった人生と誕生 (11/5) (前書き)

※一人称視点で進みます。

「オレ」なるひとの視点なので、完全に主人公の感情のままの文章となります。文法ではなく、感情のままに主人公の口調そのものです。

01. ある日終わった人生と誕生 (11/5)

<side リース>

ソンナバカナト ナンドオモッタコトカー――

いつもと同じように空を見上げていた。

地球の大会の空は排気ガスとかで曇りまくっているのだという話をよく耳にする。

田舎に行くとき澄んだ空気がひろがり、青い空が見える。

そういえば、自分も昔、祖母の住む田舎にいったとき、青い空を見たとかのんびり考えていた。

開け放たれた部屋の窓からは、すがすがしい風が吹いている。ここから見える空は青いけど、それでもこの空は灰色らしい。

「ってか、あれ何？ 昼間に流れ星？」

空を見上げているのがいつの間にか癖になっていたから、空の異変にはすぐに気付いた。

太陽も昇っている青い空には白い月さえ見えない。

だというのに、キラリと空に光る点がひとつ。

しばらく見ていたら、その正体が明らかになっていく。

それはつまりヒカリが動いているということだ：

「はあ！？ なんだよあれ！？」

思わず手にしていた雑誌が、オレの手から落ちた。

窓の外にあったのは、銀色に光り輝く球体金属。
通称円盤と呼ばれるものだったわけで。

それにはさすがに驚いた。

本気で驚いた。

だって予想外すぎだろ円盤なんて。

はじめのうちなど、言葉が出なくて呆然と口をあけたまま閉じられなくなったほどだ。

普通は驚くよね？

たぶん飛行機が民家に向かって近づいてくるだけでも普通の人なら驚くと思うけど、それが円盤だといわれたら余計にびっくりするというもの。

そう。

向かってく来てるんだ。

あまりのことに頭が働かなくて、ただただ呆然とそれを見ている
ことしかできなかったオレは悪くないと思う。

銀色のキラキラ。

キュインキュインと、いかにもテレビで出てきそうな音を立てて、
それがまっすぐこちらへ向かってきて……

一瞬後　——　オレの視界は白一色に染まった。

最後の瞬間、すべてが白で埋め尽くされる寸前に、偶然視界に入
ったのは週間で発売されている少年マンガ雑誌の一シーンだった。
風にあおられめくれたページは、青い海を舞台にした海賊たちの物
語――

ONE PIECE ― ワンピース ―

意識が途切れる寸前。

オレが思ったことはただひとつ。

「まだ今週の読んでなかったのに…」

そして世界は巨大な銀のなにかと白で終わる。

終わったと思った。

なにせオレの記憶のままでいうなら、円盤の軌道は間違いなくオレ
の部屋を直撃しただろう。

なのに意識が続いている。

しかもこれはどうしたものか。

目の前にはひげ。

そしてオレは――

目を開けたら小さな赤ん坊になっていた。

なにこれ？

もしかしてあのままオレは死んだのか？

それより――

「あぶうゝ（なんだこのヒゲ親父は！！！！）」

近い！近すぎるよ！！ヒゲのおっさんの顔がゝゝゝゝ！！！！

あまりの近さと、顔の濃さに、オレが赤ん坊だということよりも強烈だったため驚いたのだが、いかんせん赤ん坊の身体は自由に動かすことができず、オレはさらにパニックになって大声で泣くこととなった。

赤ん坊だからか、動けない苛立ちも顔が近いという恐怖もすべて泣くことに変換された。

しばらく泣き続けてようやく落ち着いたところで、ようやく周囲を見回すゆとりができた。

それにしてもそろそろいい加減にしてほしい。

自分が赤ん坊であるからには、一番初めに目にするものは自分を見守る母親でないとおかしいだろう。

なのにヒゲヅラ。

しかもこのヒゲ親父、よくよく見れば、なんかみたことがある顔だ。なんとなく。

本当になんとかなくだけど、某漫画のキャラに似ている。

さっきオレが意識を失う瞬間にみた雑誌のページに描かれていた顔をそのまま実写にして、本物の人間にしたらこんな感じだと思わせるような・・・。

たぶんこの目の前の人を漫画風なキャラに描くと”まんま”じゃないかと思える程、雰囲気から何までそっくりだった。

そう、そっくりすぎる。

この顔はどうみてもオレの『大好きなキャラの、そのお祖父様』の

“かの海軍中将”にしかみえない。
でもそれだとおかしい。

“かの海軍中将”は現実でいるはずがないのだから。
なぜならば、あれはジャンプの――

「あぶぶうゝ（あのお、あなたは）」

「おおっ！！みたか！こっちをみて笑いおったわいっ！！」

ヒゲ親父大誤解。

話を通じません。

ってか、今のは誰に言ってるんだ？間違いなくオレじゃないよな。

それよりいい加減スリスリやめれゝ！！

そうツツコミたくなかったが、目の前のヒゲへ向けた疑問の答えは予想外のところから意外と早く出た。

それに驚いて、やめろと叫ぶタイミングをのがした。

側でクスリと笑う声がしたのだ。

やわらかい女性の声だ。

この状況からして、もしかすると自分の母となる人物かもしれない
と思って視線をめぐらす。

そこでヒゲの後ろにベッドらしきものがあるのに気付いた。

どうやらそこにいるらしいが、ヒゲ親父が邪魔でまったくみえない。

でも間違いなく、もう一人部屋の中に誰がいるようだ。

なら、やることはひとつ。

「あ、ぶうゝ。きゃ! きゃあゝ (た、たのむそのひと! こいつを
とめてくれ!!)」

訴えかけるが、やはり口から出るのは赤ちゃん言葉だけ。

しかも相手からはくすぐったそうに笑っているように見えるらしく、
目の前のヒゲヅラはだれゝんと眉をたらし、鼻の下まで伸ばして
いる。

奥からは仲良しねと女性の笑い声。

「うゝんやわらかいのう!」

オレは痛いです!!

ガハハと豪快に笑いながら、少し年のいった大男が頬擦りをして
くれる。

ヒィゝゝゝ! ! ! ! !

ヒゲがジヨリジヨリと痛かった。

いい加減にしてほしいんだけど！

でもやっぱり体は自由に動かせないし、言葉も赤ちゃん言語しか出てこない。

意識はジャンプを読む寸前まで高校2年生だったせいか、赤ん坊の身体は余計に自分の体とは別物の様に勝手が悪い。

なぜか本当に赤ん坊になってしまったらしいと、今になってやっと実感がわいてくる。

っと、いうわけで。

もうこの際、赤ん坊になった事はなんとか認めよう。

原因は間違いなくあのUFOだろうことは明白だから。

それはともかく、

ガープさん。

…痛いんですけど…！

そう、目の前にいるのは、かなり若いけど、どこからどうみてもあの漫画にでてくる主人公の祖父モンキー・D・ガープそのものだ。った。

ガープといえば、あれである。

”ワンピース”

つまりここはオレが今まさに読もうとしていたあの【ONE P

【ICE】の世界ということ。

しかもガープさんの腕に抱かれているという事は、オレは彼の孫か子供にあたる立場にいるに違いない。

ぞくにいう――転生。

あるいは憑依か……。どちらにせよこの状態は勘弁してほしい。そろそろほっぺが赤くなってるって！ぜったいさ。

でもなんで【ONE PIECE】なんだろう？

まあ、他の作品より遥かに嬉しいけど。

もしかしてジャンプを持ってたから？

それじゃあ、【ONE PIECE】以外の世界に行く可能性もあったんだろなあ。

でも最後の瞬間に強く思っていたことに影響されたんなら、オレが【ONE PIECE】の中にいるのも頷ける。

これで原作の続きがわかるよ。しかもリアルで！……って、ちょっとまで。

それはつまり、オレが主人公？

だって目の前にはガープ。ガープの腕の中には赤ん坊のオレ。

たしか血の繋がったガープの孫はルフィだけのはず。

ん？それじゃあ、オレはルフィか？それともエースか？もしかするとドラゴンだったり？

いやいやまて、落ち着け自分。

いくら原作より若いからといってもこの顔はどうみても子供を生むにしては年がいきすぎてる。

それすなわち。

オレ、ルフィ？

やべえ、それはやばい。

オレが介入することで、原作と同じようにはいかず、違う未来を歩み始めるかもしれない。

それじゃあ、原作の続きを知りたいオレとしてはだめなわけで。

それ以前にあんな死線ばっかりくぐりたくねー！！

平凡日本人高校生なオレには人外魔境の戦いは無理です！

どうしようと思って、とりあえず逃げ出してみようと思ったが、所詮赤ん坊。

首も定まっていなかったためか、首を傾げようとして逆に体ごとひっくり返りそうになる。

「うあ」

転がったもののうまくガープの腕の中だけすんだが、どうやらその子供らしい態度に彼のハートに火がついたらしい。

「りーいいいすううううう！！！！」

「ぶっ！！！！」

ギャアーという悲鳴はつぶれたぶうぶうクッションのような情けない声にしかならず、頬がいままで以上に頬摺りさせられる。

ヒエー！ご勘弁を！！ひりひりする！！

……………え？

あれ？そういえば今、変な言葉が聞こえた気がしたけど…

「みろリース。じいちゃんじゃぞー！！」

「にやっ!?(ええ!?)」

……そうして天井に今にも着きそうなほど物凄く高いタカイタカイをさせられている間、オレは恐怖よりも今の発言に呆然としていた。
ありていにいおう。

リースって…

だれえっ!!!

02. だって女の子がほしかったんだもん (11/5)

<side ガープ>

一番初めの孫は絶対に女の子だろうと思っていた。

むしろ息子でうんざりしていたので、初孫ぐらいは女の子がよかった。

なにしろ自分の孫だ。誰よりも可愛い、間違いなく将来美人なるだろう。

きつと嫁に似て花もよく似合うはずじゃ。

可愛い声で「おじいちゃん」と呼んでくれるだろう孫の将来像を想像して、“花の冠”という意味で『リース』という名を考えていた。だからそれ以外の名前なんか考えなかったし、生まれたと報告があつてかけつけたときふわふわな桃色の服に身を包んだ赤ん坊を見て、“そう”だと確信した。

間違いなくこの赤ん坊は、望みどおりの女の子に違いないと思った。

まだベットのの上に寝ている嫁に許可を取って赤ん坊を抱き上げる。その瞬間パチリと目が開かれ、赤ん坊は泣くでもなく、つぶらな瞳を限界まで見開き不思議そうにきょとんとしていた。

あまりの可愛らしさについ頬ずりをしてしまった。

「あぶうー。きゃー！きゃあー」

それから気がつけば息子の嫁が「あらあら」と笑っていたが、赤ん坊はもつととも言うように目を細めて嬉しそうに笑って手を伸ばしてきた。

か：
可愛い。

初孫という負目を抜きにしてもかわいい。

それに普通赤ん坊というのは怪獣と例えられるほど騒がしく良く泣くが、この子は随分と静かで理知的な目をしている。

これが女の子というものか。

かわいさも息子と比べると百倍増しだろう。

「お義父さん、そのこはリースっていうのよ」

しばらくするとナイショ話をするかのようにこっそりと、息子の嫁が赤ん坊の名前を教えてくれた。

楽しそう、嬉しそうなクスクスとした笑みに、なんて幸せな光景だろうと胸が温かくなった。

リース。それはワシが考えた名じゃが、どうやら採用してくれたらしい。

嬉しいことこの上ない。

そうして生まれた子供はリースと名付けられた。

あとでわかったことだが、リースは男の子だった。

名前…。

言わなければいけないじやろう。

ワシは墓場までそれを持っていくことにした。

02. だって女の子がほしかったんだもん (11/5) (後書き)

<ガープさんの脳内の中での変換状況>

- ・可愛いⅡ花の冠が似合う
- ・花冠Ⅱリリース

これが爺様の脳の変換機能です。

男女どっちでも使えそうな名前でも

爺様の脳内では完全に女の子を指しているので、本人は言いづら
いと…

そうとっていただけると嬉しいです (汗)

14. 時の流れと花の“せい” (11. 6/5)

<side ガープ>

ゴール・D・ロジャーが海賊団を解散して一年ほどたったか。
五月の初めに孫が生まれた。

その同じ月に、ロジャーが自首をした。

奴はひとつの“命”を土産に、すべてに決着をつけようとしていた――。

いや。本当はどうじゃったんか……。

わかることは、もうその答えを聞くことはできず、また、あやつが
わしに託した命は懸命に“今”を生きているということぐらいじゃ
ろう。

あれから数年。

いろいろな事件があったことから、初孫のリースを海軍本部ではな
くわしの故郷である東の海のフーシャ村に預けた。

リースは、数日『あやつの子』と過ぐすや情が沸いたのか、まだ乳
飲み子でしかない幼子をコルボ山に住む山賊一家に預けようとした
とき、あの小さな足で懸命に後をつけてきた。

驚いたのは、それがわかっていたかのように、わしの服に小さな砂
袋をつけていて、そこから零れ落ちた白い砂を目印に追ってきたと
いうことだ。

『そんちよ。が、こりゃ、よんでくれた』

まだまだつたないがすっかりした言葉でしめたのは、自分を追ってくる間もずっと抱きしめていた絵本だった。

それは“ヘンゼルとグレーテル”というありきたりの御伽噺。

その物語では貧しい家の二人の兄妹が、光る石やパンくずを道しるべにしている話があった。

さらにはこの話は、はじめに親が子供を捨てることから始まり、悪い魔女にだまされたり、そこを知恵を使って回避したりとする。

大人が子供をつれていく。どこかはわからないが、もう会えないという。なら少し考え方を変えれば、こどもにしてみれば、まさにわしがやろうとしている行動は“ヘンゼルとグレーテル”の兄妹たちに当てはまらないこともない。

“こどもをつれていくⅡする”という発想が生まれたのもしかたがないと気付き、タイミングが悪かったことを知る。

砂を使って後を追うなど、リースの年には似合わないすぎる行動は、すべてこれのせいかと気付いたときには遅く、リースはドロドロに汚れた顔を涙で歪ませてダダン一家の前に立つワシの元へとやってきた。

『どうちてちゅれてくの？じいちゃ、まごって言った！ならえーしゅ。リーシュのおとうとでしょ？』

『んむう・・・じゃがのうリース。この子は強くならねばならんのじゃ。フーシャ村ではだめなんじゃ・・・』

『だめ？』

『ああ。どうしてもじゃ』

できればエースは、海軍にいてやりたい。

しかし今はだめじゃ。

ロジャーが死んだばかりで、海軍はこの子をさがすのにやっきにな

っているのもまた事実。

時が来るまで隠さねばならない。

それまでに海賊などという選択をしないように。けれどこの地でも生きぬけるほどに強くなつてほしい。

ダダンたちが山賊であるのを理解して、それでもなお――否、だからこそじやろう。ゆえに彼らに預けることを決めた。

たとえ子らが、天が、“あやつ”が、わしを非道と叫ぼうとも・・・

まだ生まれたばかりのこの幼子の命を守りたかった。

つよく、強く――。

この子が＞b＜生きれる＞／b＜ように。

『だめならリーシュもだめ！』

『リース？』

ふいに叫んだリースの言葉は意味がわからなかった。けれどそれも次の言葉ですぐに納得する。

『えーしゅはおとうと！でもフーシャ村にいりえない。

にやら、リーシュもここにいる！いつしよがいいー！！』

それからのなだめでも言うことを聞かず、しかたなくリースもダダン一家に預けることとなった。

心配なのはエースだが、『あやつの子』であると公言する者はいないと考えることにした。

なによりうちの孫もいる。

だから大丈夫だと思えた。

あの子は賢いから、ダダンのもとでも、ましてや一緒にいればエースも安心してまかせられるきがした。

まだたった二歳のこどもに・・・。

なにを期待しているのかは、はっきりいって自分自身よくわからなかった。

「あんたはなにちまいガキにたのんでるんだいっ！」っとダダンの鋭いツツコミが入ったが、それも無視した。

自分でもおかしいことをしているのはわかっていたつもりだ。

それでもリースの黒く大きな目を見ていたら、幼く稚拙な言葉とは裏腹に、そこにありありと浮かぶ知性という輝きを目にしたら、この子ならと思えてしまったのだからしかたあるまい。

あの目は子供がする目じゃない。

たぶん当時のリースは、すでにわしの行動もエースのことも自分の環境のこともすべて理解していたのじゃろう。

子供による一時の感情がおこしたダダでもなく、“理解して”なお一緒にいると言っているのだと真剣な眼差しをみて気付いた。

『しかたないのう。村長にはわしがいうておく。おまえもここに残れリース。しっかりエースをみるんじゃぞ』

『むう！まかされた！』

『うむうむ。じゃっ。ダダンよろしくの。わしはもういく』

『って、おいまてえっ！！なんであたしが！！ってかふたりも！？そもそも誰の子だよ！！』

『じゃからわしの孫じゃ！ちなみにこっちはリースじゃあ！わしの初孫での。かわいからう？』

おぬしとは違うんじゃから、リースは大切にしろ。

なあに。このかわいらしさをなくしたら、お主ら海軍に突き出してやるだけじゃがのう。まあ、しっかり面倒見ろ！！たのんだわいガツハツツハツハ』

『かわいくて山賊なんかできるかー！！』

『やれ』

『なんでだよこのクソジ・・・あ、いえなんでもないですガープ・・・さん！！ひー！！！！』

ゴーン!!!

それから数年たち、ダダンにあづけたエースもしっかり歩けるようになってくる頃には、うちの孫がいつのまにかエースを見事に懐柔（洗脳ともいう）していた。

今思うと、リースの誰よりも強い“生きる”という感情に感化されている節があるが、あの意地汚いほどの生への執着心をみせるリースがいなければ——もしかすると、エースは『あやつの子』という事実にも、絶望していたかもしれない。

一般人やあつ自身を知らぬものからは“悪魔”だといわれる存在——海賊王。

その子供であることを、エースは誰に言われずとも気付いてしまっていた。

ゆえに、あのままであれば、周囲の世迷言に惑わされ、生への執着など持たずにただただ絶望と屈辱の中で育っていたかもしれない。わしにはあれほどのものを背負った子供に手を差し伸べてやることはできないだろう。

できることは、あの子を海軍から隠し通すこと。

そして海軍に見つかつても命だけは……そう願つて、幼い頃から海軍になるよう言い聞かせてきた。

花の命は短い。

ゆえにその花が咲き誇る様は、まさに儚さの中にあるけなげな美しさ。

しかし花はどんなものよりもまた強く、踏み潰されても、それでも翌年にはまた大輪の花を咲かす生命力を持つ。

花は何よりも儚いが、植物ほど強い生命はない。

のう、リース。

おぬしの名前の理由を知っておるか？

花の冠。

たくさんの花を集めてつくらせた冠。それはまさにおまえそのものようにじゃないか。

その儚くも美しい容姿とは裏腹に、だれよりも強い“生”への想い。わしの願いもまた、失敗ではなかったんじゃないと思う。

だからおまえは—— モンキー・D・リース なんじゃろう。

「……って」

「はぐらかすんじゃないージジイ!!」

「え〜」

「え〜じゃねーよ!! なにそれっぽくかっこいいこと言ってやがる? オレはただ“事実”をきいてるだけだったの!

さあ、さっさと言え」

「うう・・・またうちの孫のことばづかいが悪く・・・」

「うるせー!! 何度も言わせんな!! 話をそらそうとするんじゃないっての!!」

そもそもしいちゃんのことだ。

どうせ女の子がほしくて可愛い名前を考えてリースにしたら、生まれたのは男で、名前を考えてなかったか、かあさんがすでにリースにしちゃったとかで、ひっこみがなくなったらきまつてる! なんでそこで男の子らしく凛々しい名前にしないかと一言母に言わなかった!?

さあ、オレに言うことがあるならさっさと白状しやがってんだよ!!

そもそもこっちには証拠があるんだ。このアルバムにかかれてるこれはなんだってんだ!! ええ?

「お、おちつけリース」

「これがおちついてられるかー!! なんでこんなファンシーな写真がのこってるんだー!!」

物凄い速さと鬼気迫る怒気をまもってゴウゴウ怒鳴り散らし、しまいには火でも吐き出しそうな勢いでフガァーっと叫んだリース。その手には、『初孫。女の子だ! 名前は花の冠からとってリース! やったぞわし!』と、リースが男である真実を知らなかったときの走り書きと、可愛いうさぎのフードにかわいいひらひらなスカート

をはいた女の子の写真が・・・。

否。少女ではなく男である。

しかも被写体の名は、リース。

弱い1歳半ば。やっと二足歩行を始めた可愛いお年頃。

この段階では、いまだ性別がわからない可愛いらしさであり、どんな衣装でも似合うかわら示唆真っ盛りの決定的瞬間の最後の一枚である。

「まだ残っていたとは。全部処分したと思ってたが。屈辱じゃー！！！！ますますしてろ！！もやせ！！その手を離せ！！！！むしろその貴様の手ごと燃やしてやる！！」

「いやじゃー！！これはわしのもんじゃー！！」

「このくそじじいがあつ！！！！！！」

追記。どうやらわしはまたリースのコンプレックスをついてしまったようである。

いや。でもかわいかったし。

あれ一枚しか、女の子っぱいの残ってなかったんじゃが・・・。

14. 時の流れと花の“せい” (11. 6/5) (後書き)

花の精。“花”のせい。

しよせん言い訳という奴です。

16. コルボ山のリース (11/9) (前書き)

子供編にとんでいます
覚悟してからお読みください

16. コルボ山のリース (11/9)

『森の友達』って、なんだかウフフアハハと妖精が飛ぶ森で、みんな仲良く手をつないで二足歩行で踊っている動物達が浮かぶのはなぜだろう。

その中心が自分で、さらにその原因がオレが短気だから…だったりしたら。

え？これどこの恐怖政治？とか思ったり。

手をつないで踊れとか、仲良くしろなんて、オレは強制は一度だってしてないよ。

仲がイイのはいいことだ。

オレに友達ができるのはいいことだ。

けど——現実の森には弱肉強食&食物連鎖というものがあって、仲の良い動物たちなんか見てしまうと。

それを喜ばいいのかそうでないのか困るところだ。

オレは今、ゴア王国のフーシャ村側のコルボ山、山中にいる。

自分が短気だというのは理解していた。

平和が好きとか、穏やかが一番とか言っている割に——一番最初にキレルのもオレで…。

だから喧嘩が嫌いなくせに喧嘩っ早くて、一番最初に手を出すのはいつもオレだと思う。

なんだろうなく。この矛盾した性格は…。

本当のオレは強くなんかないし。

元日本男子らしくかなり温厚派なはずで、血の繋がった相手にだつて立ち向かったことさえなかった。

それが生まれ変わったからといって変わるような年月は、ここではまだ過ごしていないから、オレの根本は何も変わってないと思う。たぶん異世界に来てオレが頑張れたのは、守るべき存在がいたから。

ここではまだ五、六年ほどこしか生きてないオレだが、その精神年齢は前世の記憶にさらに歳月を加えたもので、立派な大人のものだ。だからだろう。

いつもチヨロチヨロ自分の後を付いてきていた年相応な小さな存在をみて、守らなきゃ！って思った。

自分より遥かに小さなエースが背後にいたから、喧嘩が嫌いでも自分を盾にしても頑張れた。

それが大切な家族だと、余計にオレがしっかりしなきゃって思えた。始めは怖くて震えた事も今なら怖くない。

怖さを克服したのは、恐怖を怒りへ昇華させたから。

——ああ、そうか。

だからオレは短気なんだな。

オレの我慢というリミッターは、一度壊れた後には再起動しなかったようだ。

「だからってさ…」

オレの眩きにも似た言葉に、目の前の存在は可愛らしく首を傾げる。

目の前にはモコモコした……ゆうに体長5メートルを超える大型のトラがいた。

頭にこぶを一つつけて、躡の行き届いた獣のように大人しく座っている様はかなり異様だ。

さらにその隣には、食物連鎖はどうした！？と叫びたくなるほど、蛇とかワニ、むかで、しまいにはウサギとか小鳥とかが仲良く整列している。

「なんでオレを見る！？」

なぜだ？

なぜ、お山のボスでもみつめるようなキラキラした眼差しをしている？

しかもなぜそれがオレに向けられている！？

ことのはじまりはオレが短気なのが原因なのはわかっている。

せっかく山で生活しているのだ。このまま将来は山で隠居生活だ！原作なんかに関わったら、命がいくつあっても足りない。

ましてやルフイの兄とはいえ、オレは一般人だ。

そう思って、ダダン一家のアジトから少し離れた場所に家庭菜園で

も作ろうと、赤ん坊のエースは家においてコルボ山の奥にふみいた。

こないだゴミ山でみつけた鉄の切れ端とそこに落ちていた棒で作った鍬を持参しながら。

少し歩いたら、ひらけた場所をみつけたので、さっそく鍬で土を耕した。

ここなら日当たりもいいし、水場も近いので作物ができるかもしれない。

しかし作業を始めてからすぐに、シャーと一匹の蛇が牙をむいてきた。

無視してもくるので、鍬で殴って気絶させた後、その顎をその辺の蔦で縛って、本体は木にしぼりつけて大人しくさせた。

それからしばらくしているとまた邪魔が入った。

なんかしらんが、ウサギを追って虎が現れた。

しかもせっかく耕したばかりの部分を踏み荒らされ、逆上したオレはじいちゃん直伝の拳を振るっていた。

さらに食物連鎖の恐ろしさを知ることが起きる。

食料にせずとっておいた豆をまこうとしたら、ギラギラと目を輝かせた小鳥達が襲撃をかけてきた。

こらー！と追い払うものの、飢えているらしい鳥たちは容赦がない。そんなこんなでバタバタしているとふいにズシンと音がして、沼地からワニがきた。

せっかくの鍬はワニの皮膚が硬すぎて武器にもならなかった。

しかもワニと虎が喧嘩を始め……たった一日でオレの畑は無残な姿となっていく……。

オレはきれた。

殺気？うん。たぶん出ていたかもしれない。

オレは笑いながらその場に立っていただけ。

だけど周囲でいっせいに鳥たちは飛び立っていき、オレの畑で暴れていたメンツはビクリと体を振るわせると動くのをやめて泡を吹いて気絶した。

周辺の木々でボタボタと何かが落ちたり倒れたりする音も聞こえなかったがわけがわからん。

なにその反応？

オレの顔、そんなに怖かったのか？

そう思ったらなんだか泣けてきて、ぶつぶつと愚痴をこぼしながらも折れた鍬を一人で治しながらいじけていた。

しばらくして目を覚ました彼らは喧嘩をするでもなく、オレを見ると示し合わせたように側へと寄ってきた。

そのまま順々なペットのように喉を鳴らしたり、すり寄って頬擦りをされたり——なぜか懐かれた。

そして冒頭へ戻る。

キラキラと主の言葉を待つような獣達の視線は——はっきり言うて眩しい。

誤解しているようだけど、オレ、君達のボスじゃないよ。

え？知ってる？

あ、そう。

「なに？え？…手伝ってくれるんですか？」

険悪なムードだった出会いとは一転。

敵同士だったはずの動物達が、なぜか協力し合っている。

いまいちなにがあったかわからないが、一騒動あったから、性格でも変わったように動物たちはオレの話を聞くようになった。

とりあえず、それならばと、畑仕事を手伝ってもらうことにした。まずは土壌の開拓だ。

畑で最も重要なのは水と、土。

これがまず一番作物の良し、悪しを決める要となる。

鍬は折れてしまったので、新しいものを作るついでに^{ブラウ}犁をつくってみた。

身体のがっちりしたトラには、オレが即席で作った^{ブラウ}犁をひいてもらった。

これにより地表と土中のものを入れ替え、養分などの伝達を図るのだ。

さらに土壌を空気に晒すことで、より水分を保ちやすい状態にするという目的もある。

ワニには水を頼んだら、仲間を引き連れて水を運んでくれた。

どうせならこのまま水路っぽいものも作ってしまおうと、ウサギやら鹿とか、穴を掘ってもらうよう頼み、その通路にそこらにあった木の皮や板を貼り付けることで水が必要以上地面に染み込まないように補強をして水を流した。

鳥やリスからは、種となる実や植物をもらった。

途中勘違いした鳥が、ネズミを運んできたのには驚いた。

そうこうしているうちに、一日でそれなりのものができて満足した。

オレの様子に動物達も何か達成感を感じたらしく、やはり植物連鎖を無視してはいるものの、皆穏やかな空気を漂わせていた。

「うまく成長したらちゃんとあげますから待っていてください」

それを期に、今日は解散となった。

うん。なんだか濃い一日だった。

けどどしっぴかり畑もできたし、色々つつこみたいところはあるけどヨシとしよう。

あのと、生前からふわふわもこもこしたものが好きだったオレは、トラの背中に乗せてもらって森の中を走り回ってもらった。

大型のトラが仲間になったので、狩りも楽になるのでダダンたちも喜ぶだろう。

気分はすっかり爽快。

また背中にのせてもらう約束をした。

オレは決して、アハハウフフな妖精ではありませんが、友達っていいもんだね。

オレに、森の友達ができました。

泥まみれになりつつ、鼻歌でも歌いたい陽気な気分で、エースの待っているダダン一家のアジトへと帰宅した。

「ただいまー」

あのトラのモフモフ具合に完全にはだされていたオレは、いつも以上で声を上げて扉を開けただよっている臭いに首を傾げた。

焦げくさいにおいと、一緒にいいにおいがする方へと進み、一度扉を出て外に出る。

その光景を目のあたりにして――

オレは…

カ・タ・マ・ツ・タ

「おお。帰ったかリース」

のんきにガハハと笑いながらいたじいちゃんをみて、その足元でキレイなオレンジの炎を放っている。

その傍では顔を悪くしたダダン達が何か言いたそうに、オレとじいちゃんを交互に見ている。

じいちゃんの手の中からまた炎へ何かが乞いに落とされる。

先程の高揚感はどこへやら、オレの気持ちは一気に絶望のどん底へと落ちた。

家に帰ると、じいちゃんが焚き火をしていた。

手に入れた芋で焼き芋をしているらしい。

その火種とされていたのは――オレの本だった。

高町の住人でもない。お金もない。まして子供でしかないオレが、本なんて高価なものを買える筈がない。

だけど暇つぶしと、この世界を知るためにもオレがコツコツ集めたのだ。

ときには頼み込んでフーシャ村のひとにもらったり、じいちゃんに頼んだりもした。

買えない本は、頼み込んで模写させてもらったこともある。

それでも背表紙のきれいなものなどあるわけなく、ゴミ山に捨てられていたものなどは、ほとんど虫に食われたような古びた本ばかり。どれも本というにはたしかにボロボロで、オレが模写したものは広告の裏とかで、しかもいびつで汚い文字だし、本なんかじゃない子供の落書きの山にしか見えない。

わかってる。

それはよくわかるが、それでもオレの趣味によって収集されたものには違い。

それを「あ、すまん。てつきり」で燃やされてしまったはどうしようもない。

運良く、日記帳としてもらった【ワンピース】の記録は投下されずにすんだようだったが…。

これはないだろう？

「こんの！クソじじいー！！！！」

短気なオレの発火点はいかわらず低い。

<side ダダン>

「ちょ！まってくれ！！ガープ：さん！！そいつはリースの！！」

「ガハハハハ。なあにどうせリースのいつものごみ収集の一つじゃろう？」

「いや。それはゴミじゃなくて…」

「問題ない問題ない。なんならもっと良いものを次に土産に持ってくるからさすがのリースも喜びはしても怒りはせんじやろう。

まあ、燃やす前に帰ってきたらやめてやるわい」

突然やってきたガープによる、突然の奇行。

どこから大量の芋を土産にと持ってきて、そのまま焼こうとしたが、このあたりの森の木々は身長が高く日当たりも悪く、しまいには巨大な虫やワニのでる湿地やグレーターミナルなどの影響であまり乾燥したものがない。

アジトにあるリースのためたものは、そういう意味ではどれもよく燃えるものばかりだった。

そこで家捜しをされ、リースが部屋として使っていた倉庫を発見すると、ガープは嬉々として入っていく。

2畳ほどの小さな収納スペース。

そこを小柄なリースが自分の部屋にと使っていて、中には本やら紙の代わりのようなものが山のように散っている。

紙が貴重なためか、布や木材の破片まであって一種の可燃物ゴミの

山のようにもある。

まさかあれを燃やす気じゃないよな？

さすがのガープでも大切な孫の品を芋ごときのために…そこまではしないだろう。

そんなことをしたら、リースがなにをしでかすかわかったもんじゃない。

6歳でありながら自分達以上に頭が回るリースのことだ。間違いなくなにかする。

それがなにをしでかすかわかったもんじゃないから、こちらら血の気がひく思いだった。

以前仲間の一人が、リースが何かを書き溜めた紙をうっかり破ってしまったことがあった。

はつきり言ってリースの字は、山賊のあたしでさえどうかと思うほど汚い。

そのせいでゴミと判断した部下がそのまま紙を細かく割いて捨てたのだ。

あの時のリースの怒りは、凄まじかった。

一瞬ビリリと空気が震えたかと思うと、紙を破った部下はリースにタックルをくらわされ、床に押し付けるようにリースの下敷きになっていた。

そのままリースはボロボロと泣きながら、相手の襟をつかんでずっとブツブツと愚痴をこぼしながら揺らしていた。

幼いリースの攻撃は痛くはないが…あの精神的苦痛を与えてくる呪詛めいた独り言は勘弁してほしいところだ。

おかげで下僕Aがその日は、使い物にならなくなっていた。

まあ、リースに殴られなくて良かったと思っていたら――翌日そい

つはなぜかアジトの前で逆さ吊りになっていた。

顔を洗いにいったら、足元から突如ロープが持ち上がって引っ張られたという…。

こんなことをするのはリースしかない。

しかし本人は昨日からふてくされたまま物置にこもっていたので、それが人の手によって引っ張られたのではないと気付く。

たった一人だけをはめるために念密な計算をされた罠^{トラップ}だったのだ。

他にもリースのイタズラは、イタズラと呼べるレベルを遥かに超えていて、どれも『罠』と呼ぶに相応しいものばかりだった。

仲間達は前回の逆さ吊りの一件依頼、極力リースの短気には触れないように警戒するようになっていた。

そうしていれば普段のリースは大人しく、本を読み漁ったり、エースとたわむれたり、自分達を手伝ったりと、どこにでもいる子供のようだった。

しかし、今。目の前にその逆鱗に触れそうな事態が起きている。

対象は実の祖父とはいえ、あのリースがだ。

自分の収集物をどうこうされて、黙っているとは思えない。

リースのことをよく知っていただけに、ガープの奇行を必死に止めようと部下達が群がる。

あたしも一応は止めに入ったけど、ガープの奴は聞く耳持たない。必死にリースの収集物を守ろうとした奴らは、当のガープによってすぐに吹き飛ばされ、扉へと続くまでには人でできた道ができていた。

道がどんどこできていくのを見ているだけだったあたしも口だけじ

やなく体でとめにはいるも——間に合わなかった。

つと、いうかガープの奴。容赦しなかった。

ガープはガハガハ笑いながら容赦なく——薄汚れた布にうねうねと『謎文字』と化したリースの本の模写（たぶん何かの絵本だ）を焚き火に燃やした。

タイミングがいいのか、悪いのか。

そこヘイイ笑顔をしたリースが戻ってきた。

ワニとでも決闘してきたのか、頭から足の先まで全身ドロドロだった。

そのリースがガープの手の中にあるものを見て凝固していた。

ああ、さすがに固まるぐらいするだろうね。

「おうやつと帰ってきたな」

ガープはそういいながらも手を止めることなく、”物”を投下していく。

むしろ一気に手を離れたし!?

煽っているのか？ そうとしかみえねえんだよ！

自分の孫だろう？ 可愛くねーのか？

なんであんだ、そこまでしてリースを怒らせたいのかね!？

絶句しているリースの視線がぎこちなく、火の中に投げ出されたゴミにしか見えない物体に向けられる。

視線はそのままガープの足元にある大量の芋山に向けられ――
戦闘が始まった。

しかし怒りに我を忘れて殴る蹴るののしるの連続攻撃をしていたリースは、あっけなく笑うガープにあしらわれて終わった。
完全敗北かと思いきや

「うわぁ~~~~ん!!!! じいちゃんのバカァー!!!」

ガープさんとは似ても似つかない大きめの黒い瞳にブワリと涙を浮かべて、リースは走り去っていった。

遠くの方で「復讐してやる!!!」と殺意の混じった呪詛とともに、泣き声がこだましたのには――何も言うまい。

ただこれだけは言い切れる。

あのリースなら本当にどこからか五寸釘でも探してきて、恨みつらみ、愚痴という名の呪詛に怨念をこめながら、ガープを呪いそうだが、しかも効力がありそうで怖い。

そのあとキョトンとしているガープが「ワシ、なにかしたかのう?」と首をかしげていたが可愛くない。

むしろいい大人がやるな!と言いたいが、それを言ったらこっちの命がないのでだまっておいた。

とりあえずあんたが燃やしたものは、『リースが書きためた本』だったんだよと理由を説明してやると、しまったわいと頭をたたいて困ったような顔をしていた。

たしかに。

普通はあの可燃物置き場を見て、本だとはだれも思わねえな。

「…これゴミじゃなかったんかい。ってか文字か？」

地面に数点残された服の切れ端をつまみあげ、じつくりと観察するガープは次第に眉間にしわを増やしていく。

どうみてもカタツムリが這った跡か、線の落書きにしか見えない。しかしよくみると確かに自分達のなじんだ文字にも——ギリギリだが、みえないことはない

たとえば——これはねじれただけの線か、カモメマークにも見えるが『M』に違いない。

リースがあれを字だというのだから、字に違いないので頷くと、「ううむ」とガープは頭を抱えていた。

その難しい顔の原因は、あまりに芸術的な字に対してか？

それともリースへの罪悪感からか？

たぶん前者だろうなと——この先のことを考えたら頭が痛くなった。タダじゃ終わらないのが、この爺孫だ。

食べるだけ食べて（芋を）、勝手に酒を出して飲んでいるじじいことガーブ：さん。

今日のところは帰るらしいが、ここまでのあいだにリースが帰ってこないことが恐ろしい。

あいつなら間違いなくなにかしでかす。

そう思っただけを緊張して過ごした。

へたすると森中が地雷原みたいになっていそうで、周囲をつい警戒して見回していた。

横に並んで山の麓まで歩くと、ガーブを見送っているか護衛のようだ。

やっかいごとばかり持ってくるガーブの見送りなど初めからするつもりはないが、そうみてもしかたない。

本当はリースをさがしていた。

今は行方をくらましたリースの方が気になるのだ。

なにかをして山が荒れる前に、つれて帰ろうと視線を動かして探すか、やはり気配は感じられない。

そこでふいにガーブが足を止め、ニヤリと笑ったのを見た。

ついに”来る”のかと思った瞬間――

「しゃがめえっ！ダダンっ！！」

遠くから響いたリースの怒気をはらんだ声に、条件反射で地面にひれふす。

っと、それからすぐにブン！！と質量のある何かが頭上を取りすぎる音と風が動いたのを感じた。

なんだろうと思って音が去っていたほうへ視線を向けると、振り子の原理で先程の”何か”が勢いよく戻ってきた。

「ヒー！！」

「む。きおったな！」

かなり太い丸太が、横にスライドしてきた。

それもいくつも。

どれも太く、頑丈そうな蔦で幾重にもしばって振り子のように動くため、何度もあたしの頭上をブンブンと音を立ててよぎる。

あたしがそのまま立っていたら直撃したのはガープではなく自分だったのは間違いない。

案の定、目的はあたしではないようだ。

丸太は見事な軌道を描いて、あたしの側で拳を構えて待ち構えているガープのみに集中されている。

「こい！全部粉碎してやるわい！！」

楽しそうなガープの声が聞こえる。

それとともにまたあたしの頭上を丸太が風を切って横切り――

ズドォーーン！！

スライドしてきた丸太がガープに勢いよく命中した――かにみえた。しかしよくよくみるとガープはニヤリとした不敵な笑みを浮かべて巨大な丸太を受け止めていた。

ミシリと音がし、ガープの手元にひびが入っていくのを目にした。

バキンッ！

腕力だけで文字通り粉碎された丸太の破片が衝撃でとんでくる。
まだまだ振り子運動を繰り返している丸太もあり、頭を抱えて目を閉じる。

あんたら本当にありえないな！

リースはどうやってあの小さな身体から、このどでかい大木をどうやって吊るしたり切り取ったのかわからないし。
迫り来る丸太の山に笑って、平然と拳だけで碎いていくガープも信じられん。

早く終われ早く終われ早く終われ早く終われ！！
こんな非常識なことに、あたしを巻き込むんじゃないよ！

すぐ頭の上や背中近くで何かがよぎる気配を感じるたびに、背筋に冷たい何かが走った。

ドッカーン！バキィ！

そんな音が何度して、あたりが静かになった頃――。

「ふん、これで終わりか。たわいもないのう」

ガープが足を止めたまさにその瞬間。

最後の一発といわんばかりに、いままでとは違う方向から巨大な丸太がやってきた。

終わったとばかり思っていたために、油断したのだろう。

その丸太はあたしのすぐ頭上をスライドして、ガープに直撃した。
弾くことも粉碎することもできないタイミングだったせいかな、ガープが軽く吹っ飛んだ。

最後の丸太はそれぐらいの大きさがあった。

恐ろしいのはその後だ。

「ぬなっ!？」

少し離れた場所で驚いたような声が聞こえ、ガープが吹っ飛んだ先で突如地面の底が抜けた。

深さは20cmほどしかないが一瞬足を崩すには十分だった。

その瞬間を狙ったように、あの最後の丸太が”戻って”きた。せまりくるそれにさすがのあたしで一瞬恐怖する。

降りかかってきた丸太につい悲鳴が漏れるが、慌てて息を呑み、頭を抑えて今度こそ立つまいと地べたに張り付く。

そこでふと気付く。

あたしがしゃがんでいる範囲のみ攻撃がこない。

まさかリースの奴、ここまで計算してこの無数の罠を作ったのかと、冷や汗をかきつつ…目の前の光景に目を見張る。

先程自分の身体をはじき飛ばした丸太をガープが掴んでいて、バキッ!と音がし、フンヌッ!という掛け声とともに気合を入れる音がして――ガープは「いい威力じゃった」と楽しそうに笑って最後の丸太を粉碎する。

…に、人間じゃねー。

更に、なんとか…驚いたことは続く。

ガープが丸太を粉碎したことですべての罠による攻撃が終わったのかと思えた。

しかし音が静まったかと思えば、それは嵐の前触れという静けさだった。

ふいにブチっとなにか紐が切れるような音がすると、ダダンの頭上からは小さな石や蛇や蛙などが大量に降ってきた。

気の弱い人間なら失神していそうなゲテモノシリーズだったが、ガープはそれを鼻で笑って軽く避けた。

っが

「ぬわっ!!」

ガープの悲鳴が聞こえた。

足元には、予測されたような穴はない。

今度は穴ではなく、ちょうどガープが避けるであろう場所を狙い、その真上から木の枝や大きめな石の数々が垂直に落下してきた。

ただ、そのどれにも紐やら蔦が付いていて、ガープの頭と同じくらいの高さに落ちるよう調節されていたのが恐ろしい。

ゲテモノはあくまで誘導するためのものだったらしい。

「ハッ!! やるのう。楽しくなってきたわい!」

あたしが呆然と見ていると、今までの攻撃を一通り避けたり、拳の風圧ではじけ飛ばしていたガープが、「さあ、こい」とでもいうように仁王立ちする。

もうここまで罠が張り巡らせているとナルト、この森の中はリースのテリトリーといってもいい。

そこで無防備にたたずむ相手を狙うようなリースじゃ……いや。相手がこの人なら間違いなく狙うか。

——シュン!

ドスドスドスドスッ!!!!

やはりきた。

頭上から鋭利に尖らせた竹が勢いよく振ってくる！

血の繋がった実の祖父を本気で殺す気か！？と思ったが、しかしそのどれにも紐がついていて、ガープの後頭部スレスレの位置で落下物は止まるのでコチラまで被害はない。

しばらくは石やら蛇やら竹細工やらがあちこちから飛んできたり、ふってくるが続いた。

ガープは地面を拳で吹き飛ばしてその風圧でガードしたり、鋭い洞察眼で避けたりと――みごとな手腕でリースからの罠の数々を避けるが、なんだか見ているうちにボロボロになっていく。

どうも予想外のところに隠された罠がいくつかあるらしく、罠を破壊すればそれがキーとなってまったく別の方向から別のものが飛んできたりしていた。

げ、芸が細かいな。

それよりもあまりの罠の数に、これは一日やそこらで作ったものじゃないだろうと思え、いつかガープを暗殺する計画でも立てていたのかと思えたほど。

なにより、こんな罠がそこらじゅうに張り巡らされていたら、あたしたちも無事じゃいられないじゃないかと背筋が冷たくなる。

しかしそこでふと気付いた。

なぜかあたしには被害がこない？

服もだんだん擦り切れてよれよれになってきているガープとは違い、動いてないのもあるだろうが、あたしはまだ一度も罠に当たってないし。誤射撃が来ることもなかった。

これはリースの配慮か？

とりあえずこのままジジイとリースの攻防を大人しく見ていたほうが安全に違いないと、あたしは道端の隅の方によけて座った。

座っていると、そこで地面を通して、何かの足音が聞こえてくるのに気付いた。

地面に耳をつけて詳しい音の出所を探ったところで、何か大きな獣がこちらにむかって疾駆しているらしいと判断する。

「オレの恨みおもしろいジジイー!!」

その声とともに、ガオーとなにか獣の方向がして、大型の動物が茂みを突き破って自分達の目の前にドン!と姿を現した。

「いけえ!! 第二派あ!!」

ガサガサ がさっ!!

タンと地を蹴る音がして、リースを背に乗せたトラが現れた。

これにはさすがにガープも驚き目を見開いていたが、すぐに楽しそうに目を細めると戦闘体制に拳を構えた。

しかしソレを逸早く察したリースがその黒く澄んだ瞳を細めた。

「くる!」

トラに指示を出すように、つかんでいた毛をクイッと軽くひっぱる。それにトラはガープに襲い掛かるのをやめて距離を開ける。

きたたリースの目はギラギラと悪意に輝いていて、なんだかわるがきのようだが、目の前のガープもまったく同じ目をしてリースをみつめて笑っている。

違うのは片方に殺意があり、片方に愛情のようなものが見えることぐらいか。

「穴を掘ってオレの本の墓に一緒に埋めてやるよ!」

「はっ! おまえなんぞにやられるじいちゃんじゃないわい」

激しい戦いがあった。

その末――埋められたのはリースだった。

「まだまだじゃのう。次にワシに負けたらお主を海軍本部へつれてやるからな。安心せい。ワシみずから鍛えてやろう」

「だれが海軍なんぞになるかー！！」

海賊も嫌いだが、海軍なんかもっと嫌いになるぞ！！

そんな脅しが、ガープの腕力によって地面に開けられた穴の底から響いた。

しかしガープはそれにわらうと、「そんなんだめじゃーい！じいちゃんを泣かした罪じゃ反省しろ！」と身勝手なことを言うのとニヤリと笑って、側らの土の山をかけて穴を埋め始めた。

ギャーという声と、慌てて地面に上ろうとする音が聞こえ、リースが穴から這い出てきた瞬間、ガープは一気に穴を埋め、リースがでれないようにしてしまった。

唯一地面から出ているのは首だけとなってしまったリース。

まるで地面から生首が生えているようだ……つい視線をそらした。

それだけやると満足したのか、ガープはヒラヒラと手を振りながら、今度こそ去っていった。

孫二人を海軍にさせたいらしいガープ。

だが、その押し付けがましいところが、逆に二人を海軍から遠ざけている気がする。

エースは海賊にただ希望しか見ていない。

リースはたぶん本来の海賊がどんなことを知っているのかわかって

いるんじゃないだろうか。

それでも嫌がるのは、争いや血を好まないことと。まあ、面倒臭いってのが一番だろうがな。

そんな二人だから、海軍になりたくなくなるんじゃないかと思う。たとえば二人にとって本物の海軍といえ、いまのところこのガープだけだ。

これを見本に海軍に入れといわれてしまえば――

絶対、なりたがらないだろうよ。

ガープはそれをわかっていない。

あえて言う気はしねえが。今日何度目かの溜息が自然と出た。

「くそー!! おぼえてろよー!!」

そう叫ぶのは、地面から首だけ出すリースだったとか。傍ではリースに味方したトラが目を回して気絶していた。

「やれやれ。一撃でやられるならあんたも無茶するんじゃないよ」

なんとかガープの気配が消えたのを確認しほっと息をつく、埋まっていたリースを引っ張り出した。

体をブルブル猫のように震わせて、土を落とす様は小さな身体とあいまって本当に猫のようだった。

しかも毛を逆立てた黒猫。

「くそっ!! いつかぜってー!!」

なぐるのか？倒すのか？まさか勝つ気なのか？

お前はただでさえちっこいんだからやめとけ。そう言いかけて——スベッタ。

そう思ったらやはりリリースは予想外の斜め上を行った。

「ぜってー！！逃げてやる！！！」

世界の果てまでいってでも逃げ切ってやる。って、普通そこは『追いかけてやる』とかじゃないのか？

おいおい…

——相変わらず変な中将と変な孫だ。

' ★
 。 、
 ..
 ..
 。
 .
 ..
 ..
 .
 '
 ☆
 。
 .
 ..
 ..
 .
 '
 。
 ★
 。
 、
 ..
 ..
 。
 .
 ..
 ..
 .

《オマケ》

遠い未来で、平穩をのぞむ子供の師のさらに友人達は語る。

「そりゃあ、『覇気』だよ。おめえ…って、覇気イ!?!」

「ありえね。本当にありえないよ少年」

「おまえの常識がおかしいことはみんな知ってるがぁ…」

「六歳で『覇気』つかうたぁ、どんだけ常識外なんだよ!?!」

「へ? なんですかそれ?」

「つえー奴ってことだよ」

「や。ありえないですから。それよりハキってなにさ?」

22. リースをとめろ (11/10) (前書き)

時間軸と一部捏造中につき、すでにサボがいます。
細かい時間軸は話が増えると思われるので、そのうち・・・

22. リースをとめろ (11/10)

<side エース>

その光景をみたとたん思わずオレは顔がひきつった。

「いますぐはなせバカ！」

「り、リース君！？なにしてるの！」

手に持っているものを頑として離そうとしないリースに、マキノもダダンも必死に引き剥がそうとしている。

それでもリースが離れないことに、おれまで冷や汗が出てきた。

「や、やめとけよリース……」

「エースも言ってるだろうがこのクソガキ！早くそれを離しやがれ
ー！！」

「嫌だっ！！」

「そうよリース君！いますぐ離すべきよ」

「これは男として、離してはいけけないと神からのお告げがあったもの！！そもそもここはつなげなくてはいいけないんだあ！」

「まて！おちつくんだリース！！」

その日リースの側で様子をみていたダダンが、物凄い形相で家を飛び出すとマキノと一緒に戻ってきた。

マキノも始めはいつもみたいに「なに？どうしたの？」と笑ってい

たが、リースの様子をみたたん顔色を変えて必死にリースしがみついていた。

ダダンとマキノの二人がかりで机から引き剥がそうとするが、男にはやらなきゃいけないことがあるとか、これが男のキョウジだとか叫んで食い下がらない。

それ以前に意味が分からない。

なんでそこまで言いたくなるほど必死に机にしがみついているリースにダダンが怒鳴るも効果はなく、マキノが泣きながらそれは世界的に間違っていると説いてもリースは逆に意固地になるだけだった。

そんな攻防が続けて30分ほどしてサボが姿を見せた。

リース達の様子をみて何をしているのか聞かれ答えると、さすがにサボも呆れていた。

だけど【実物】をみて、サボはリースを誉めた。

皆が目を見張るなかサボは、ここまで凄いと一種の芸術だと笑った。言われた瞬間、あれほど机にしがみついていたリースがあっけなくテーブルから離れ、サボこそ希望の光とでもいわんばかりにでかい目をキラキラ輝かせた。

サボはそれに苦笑して、ほどほどになとリースをとめた。

チラリとリースが持つものと、机に置かれたものをみて、若干サボの顔も引きつっていたのは、やっぱりあいつも同じことを思ったに違いないとおれは心の中で同情した。

さて、ことの発端はリースの字の汚さにある。

おれよりも年上の癖に、記号だか落書きだか分からないような、ミミズののたくったような字を書くリース。

そのせいで随分前、ガープのじじいに手書きのメモを燃やされたことがあったらしい。

あれから数年がたつがいまだ改善されないそれに、みかねたダダンがリースに文字を教えていた。

しかしリースは、ダダンになにを言われようと、周囲の山賊たちが丁寧に教えようと・・・・・・・・

手にしたペンを決して離すことをしなかった。

文字はつなげるものとか叫び、机にはりついてまで文字と文字をつなげようとする。

あまりの頑固さにねをあげたダダンが、マキノなら：と彼女を強制ときに引きずり込んだが、やはり結果は同じ。

むしろリースはさらにいじになって、無理やりA～Zを一筆で書き続けている。

しかも筆記体の手順とも違っているので、相変わらずミミズだか記号のようになっていく。

それを止めたのはサボの一言。

それをみたおれは、飴と鞭という言葉を出した。

しばらくおれはリースを含むその周辺に対し、他人の振りをしたくなかった。

思わず宙へと視線を彷徨わせている間に、リースはしぶしぶとサボに文字はつなげてはいけないといわれていた。

って、いうか。

なんで文字の汚さだけで、ここまで大事に発展したのかよくわからなくなった。

いろんな意味で、リースおそるべし。

! ★ ○ / ○ ! ★ ○ ! ★ ○ / ○

<side
リリース>

あくまで前世の自分と比べるとだが、今の方が頭がいいと思う。

なにせ前世17年分の知識を元に、新しいことを学んでいるのだ。
普通の子供よりは頭がいいのは当然だ。

中身はおじんだからな。

それに赤ん坊からやり直したのが良かった。

硬くしなびれた前回のオレの脳は、現在まだまだ柔らかくいろんな
ことを吸収し続けている。

簡単に言うと言語記憶力が上がった。

たぶん考えかたどころか、物事への理解力ができた。

子供の脳っていいよね。

なんでも吸収するのが早いから大人の知識、自我を持つおれは生前
より物覚えが凄くいい。

生前の記憶まで覚えていて、されには頭がいいからといって、人は
決してすべてが完璧ではないことをここに記す。

そう。ときにその前世での経験が、今世に影響してしまうことだっ
てあるのだ。

たとえば、今日。

机にしばられてダダンにペンと紙渡された。

なにごとだと思っていたら、あまりの字の汚さに、字の書き取りの
練習をさせられた。

オレの字が汚いと彼らは言う。

だから以前、じいちゃんにメモとか燃やされたんだと説き伏せられ
たが、だってオレにだって前世の誇りでもあり、同時に（文字通り）
死んでも抜けなかった癖というものはあるんだ。

そのプライドと習性のせいで、筆を持つとき同様、紙からペン先を
離さずにいた。

むしろ離しちゃダメなんだここは！！

しまいにはダダンがついにマキノさんを村から呼び寄せた。

いやいやいやいや！！文字はつなげないと！

これは日本人特有の癖です！！

だって漢字やひらがなとかは、筆を最後にさらっと流したほうが綺麗なんだー！！

実はオレの前世で唯一得意なことは、書道だった。

日本語や漢字は筆を払い、その先と次の字の始まりが同じように書くものだ。

つまり達筆な人ならば、文字が続いて見えるあの古風な書き方が得意なのだ。

っが、しかし。

このワンピース世界において、字とは英語。

すなわち英字である。

海軍とかたまに漢字を使用しているが、メインは英語。

ゆえにオレの日本風な達筆すぎる筆遣いは英単語の筆記罫を書くには不向きすぎた。

オレの達筆さをミミズののたくったような字と表現する奴らに俺は涙が出そうになる。

ああ、いっそのこと、オレの字の美味さを理解してくれる人を探しに旅に出るのもいいかもしれない。

・・・って

サボの甘い言葉に乗って、オレはさっそく土下座した。

オレは原作にも海軍にも関わりたくないんだ。
そうだ。

もっと英字の勉強をしよう！読めるだけじゃなく、綺麗な字をかけるようにならねば！！

このままじゃ海軍しか行く場所がなくなってしまう！！

「お願いします！！オレに綺麗な字の書き方を教えてください！！」

突然態度を変えたオレにエースが遠い目をしていた。

ダダンには、始めからそうしてろと頭をはたかれた。

マキノさんは涙目になりながら、よかったって微笑んだ。

周囲の山賊さんはホッとひといき。

オレが教えるこうたサボ氏は苦笑。

なんだよ。

みんな、そんなにオレの字が間違ってたというのか？

それともあれか？突然態度を変えたことに対しての態度かい？

だってしかたないじゃないか。

こんなこと（日本語しかかけない字の不慣れさ）のせいで、海軍なんて危なっかしい場所に未来を縛り付けられてたまるか！！

オレの平穩を守るためなら、いままでの誇りなんかそくらえだ。

そうしてオレは英字の勉強に励んだ。

これで海軍行きの未来は回避できたに違いない！！

がんばれオレ！

61. 海軍将校の逃亡 (11／11) (前書き)

ココから原作軸。

ルフィ17歳。リース22歳。

能力とかのネタバラシは、前の章でリースの能力が判明するまでは
明確には書かないかと・・・。

61. 海軍将校の逃亡 (11/11)

その話を聞かされたたん。
オレは窓のサンに足をかけていた。

「いま、いくつじやったかな？」

なぜか上から回ってくる自分のもの以外の仕事に追われたそんなある日、祖父モンキー・D・ガープはニコニコと嬉しそうな笑顔でオレの執務室にやってきた。

祖父が満面の笑顔でここにやってくるなど、今までの経験上あまりいいことはない。

しかも手にはなにやら紙袋が複数。
嫌な予感ほさらに強くなる一方だ。

今度は何の用だろう。

まさかあの紙袋すべて、後始末用の書類とかいわないよな？
代筆か？それはそれで・・・そんな量イヤだ。

だけどなぜか今日は、第一声が「すまん」じゃなかった。
なんで年齢なんか聞くんですか？
ああ、もう！オレ、今日で5日も徹夜していて死にそうなんですけど。

そもそもオレの仕事はとっくに終わってるんですよ。

「はゝ・・・22です。孫の年も忘れたんですか？」

「お前ももういいとしじゃな」

「そうですね」

カキカキカキ・・・オレは書類に目を通して、次々にペンをいれていく。

じいちゃんの話をもとに右から左へ流す勢いでスルーすることを決めた。相変わらずじいちゃんはそんなオレの様子など気にもせず、勝手に人の部屋のソファでくつろぎながら、なぜかモジモジとしている。

「じゃろ。お前はわしに似て顔もいいし。もてるじゃろうし」

「もてるかどうかはさておき。じいちゃん、いえガープ中将…本当になんの用ですか？」

オレがペンをとめ、胡乱げに顔を上げてじいちゃんを見ると、視線が合ったことを喜ぶようにパー！と待ってました！と顔を輝かしてなにやら「そうじゃろうそうじゃろう」とウキウキと紙袋の中から暑さ10cmの紙の束を――三つほど取り出した。

「まだあるぞい」と言って、バンとそれを机の上においてニカッと笑顔で

「いい見合い相手を」

ガタン！！

「この書類を提出してきます！！」

何人分！？てか何センチ×何束あるんだよそれ！？

とつつこみたくなったほどの紙束をみて、オレはじいちゃんがすべ
てを言い切る前に自分の刀を持って窓から飛び降りた。
もちろん書類に関しては言い訳で、あとで誰かが取りに来ることに
なっていたのでおいてきた。

「この子なんか可愛いと思うんじゃが……ってリース！！
うっおとおおい！！リー……ス……！！またんかあ！！」

「だれが待つかこのくそじい！！」

こうしてオレは全力疾走で海軍本部を駆け抜けけると、気配を断って
建物の影に隠れ、そのまま今にも出向しようとしていた船に飛び乗
った。

突然飛び乗ったにもかかわらず追いつかず追いつけずこともなくすんだのは、
この数年で階級を上げた成果だろう。

真剣な顔をして「極秘任務につき途中まで同行させて頂きます」な
んて上官ぽく威厳あるようににらみを利かせて言えば、海軍の『正
義』の文字を背負う身としては下っ端集団の彼らはあっけなく乗船
を許可してくれた。

そこでまんまとじいちゃんをまき、イーストブルーまで送ってもら
うと、途中で降りて、自分の能力を使っていっきに故郷フーシャ村
まで跳ぶことにする。

実は剣の師匠とエース以外は、オレが能力者であることを知らない。
なのでここで身に着けていた海楼石を外して、能力を使ってしまう
ば、この島以降からのオレの消息はそうたやすくはつかめないだろ
う。

さあ、逃げるぞ。

見合いなんかやってられるか。

しかもあの人のもってくる【かわいいこ】という基準がなにかおか

しい。

依然見せてもらった【可愛い子】は、どこかのオカマ王国にいな筋肉の多いごっつい子がおおかった。

却下だ却下。

それにオレはまだ22歳。

まだまだ自由でいたいお年頃だ。

そもそもオレは好きな人があるんだー！ー！ー！ー！！！！

・・・そういえば、原作でいうなら今ってどの辺だろう？
まあ、いっか。

オレが原作に介入するとは到底思えないしね。

そんなわけで、海軍本部から逃走中なオレ。

61. 海軍将校の逃亡 (11／11) (後書き)

※過去編で明かされますが、リースには実は好きな人がいます。

62. オレを助ける。オレ、にげろっ!! (11/12) (前書き)

リリース、縁談が嫌でゴア王国へ帰郷

基本リリースはきれてないときはデスマス口調です。
キレルと柄が悪くなります。

6.2. オレを助ける。オレ、にげろっ!! (11/12)

はじめにいっておこう。

生まれてから一度だって、原作介入とかは考えていなかった。
ただ：

「オレを助ける」

フーシャ村を今まさに旅立つ寸前のルフィに頼み込んだ。

じいちゃんのめちゃくちな縁談騒動から逃げている最中、偶然
師匠とであつた。

きっと彼の元にもそのうちじいちゃんの魔の手が届くだろう。
なにせオレが逃げる先——知り合いの数は、めっばう少ないのだから。

逃げ場も必然決まってくる。

そんなこんなで、久しぶりに会った師匠に事の次第を説明したら、
師匠はあきれたような顔をしつつもじいちゃんが来たらオレの行き
先をごまかしてくれることを了解してくれた。

とにかくこのままグランドラインにいたら、間違いなくじいちゃん
につかまる。

海軍に一度でも見つければ、間違いなく通報される気がする。

だから一目散にグランドラインから逃げた。

少しでもじいちゃんの目から遠ざかるためと時間稼ぎにとフーシャ

村に戻ってきたら、いいタイミングでルフィが船を出しているところだった。

ルフィのことだ。

間違いなく航海技術もなく漂流するに違いない。

なら、行く先も分からないままフラフラと海を漂流していたら、さすがに友達が少なくて行き場のないオレでもじいちゃんに見つかる確率も下がるだろうと考えた。

だからこれが原作の始まりだとかいうのはまったく考えもせず、とにかく「追われてるんだ!! 助けてくれ!」と必死になってルフィに頼み込んだ。

そもそもルフィがガープじいちゃんと出会うのは、グランドラインに入って随分たった時のはずだ。

ルフィについていけば問題ないだろうと、もう本気で本気でルフィに頼んだ。

必死すぎて途中で自分がキレていて、口調が普段の「ですます」口調から粗野なものに変わっていたり、ブチブチと呪詛のようにじいちゃんの悪口を言っていたのも気付かなかった程。

ルフィを送り出すためにいた人々によって突っ込まれたことでやっと思痴っていたことに気付いたが、ルフィは相変わらず楽しそうに笑っていた。

「つで、助けてくれるんですか?」

「ああ、いいぞ。リースと一緒にならたのしくなりそうだしな。うっしししし」

可愛いじゃないか。

こうしてオレは、前回とは違ってイーストブルーのゴア王国
ーシャ村より、新たに旅立った。

さあ、愚弟よ！！^{ルフィ}気の向くままに漂流するがいい！！
行き先の想像もつかない漂流これぞまさにオレの理想だ！！

ガルルウ！！！！

「ゴムゴムのーガトリガン！！」

「さすがルフィ。海王類もイチコロですね」

「しっしっし」

ゴォー

「わお。大きな渦ですね」

「アッハッハ。こりゃあ、さすがにやべーかもな」

「助けは必要ですか？」

「さあ？」

「さあ・・・って、あ、ちょ・・・」

ゴォォォォォォォォ

ぎゃあ~~~~~

とぷん

6.3. 能力？そんなもん変装につかうにきまつてるだろ (2/13)

旅立って初っ端から大渦と遭遇。

まさかあんなものと遭遇するとは思わず、悪魔の实の能力で泳げないルフィは溺れる前に船に積んでいたタルに突っ込んできっちり蓋をしめた。

オレは海楼石の腕輪を外して能力を開放して、渦に飲まれる前に脱出した。

ギリギリというところだろう。

とっさだったから、ルフィに対してオレの能力で助けることはできなかった。

ルフィは大丈夫かな？

あんな子でもオレの实の弟なんだけど・・・。

気配を探っていると普通に元気そうで安心する。

だけど渦のせいか随分遠くに流されたみたいで、ルフィ入りのタルが行き着く先の島に先回りしておく。

空間に漂う空気を操り、風を操るのと同じ原理で、地面に着地する。

ふわりと空気が動き、オレが無事地面に足を着けたところで、今の現状がよくわからなくて首を傾げつつ、初っ端からのトラブルに頭が痛くなる。

「やれやれ。初っ端から酷い目にありましたね。誰ですかトラブル

を引き寄せているのは」

オレか？それともルフィか？

もしかすると一族総出でトラブル体質なのかもしれない。

なんて厄介な。

そんなところばかりしつかり血の濃さを見せ付けなくてもいいのに。

それより、目の前で呆然としているピンクの髪のだるゝんと顔の長い少年にどう説明すれば……。

って、なんか怯えられてるよ。

んゝ。なんでさ！？

オレ、まだなにもしてないのに。

「あれ？」

相手の顔をよくよくみて、どっかでみたことあるような気がして思わず首をかしげる。

目が悪く歪んだオレの視界にはつきり映るこの桃色の髪具合。

誰だったかな？

いや、でもこんな派手な色は、七武海のドンキホーテ・ドフラミンゴぐらいしか知り合いにはいない。

ということは原作か？

そういえば原作の始めの方で、ルフィがタルで漂流するとかいうシーンがあったような？

そこでふくよかMAXなおばさんと会って——わお。まさかこの桃色の子って、コビー？

まあ、互いに名乗っていないから、少年がコビーだとは断言できないけれど。

つくづく感心する。

生身でみると、やっぱり紙面で見ていたのとは、少し印象が変わるのはおりしもガーブ爺ちゃんだけではなかったようだ。

——というか、本当に原作軸に突入しちゃったんだね。

今、改めて気付いたよ。

なんでルフィが島を出たところで気付かなかったんだろう。

なんで近海の主とバトツたり、大渦に巻き込まれたところで、これこそ原作軸の始まりだと確信できなかったんだろう。
なんてこったい。

オレは絶対関わるまいと決めたはずの原作になぜか、しかもちゃっかり一緒に旅をしちゃってるんですが一体全体どういうこと？

もう、神様なんて信じない。

それよりこのままルフィと旅したら、爺ちゃんからの縁談よりまずいかもしれない。

たしかルフィの旅の中で、オレの師匠と出会うシーンがあったはず。

あわよくば師匠とかち合う前に退散させていただこう。

それまではしかたない。どんな未来になるか分からないけど、じいちゃんに捕まるよりましだ。

縁談の日々もいやだ。

この際、仕事をしなくていい有給を取ったと思って、少し冒険に付き合うのもいいかもしれない。

あとオレのマドンナを探すっていうのもいいな。

あ、オレ、実はもう十年近く片思い中なんです。

頼む答えをくれ！と訴えた翌週。オレが愛した女性は行方不明になっ
てしまったので・・・。

むしろオレのプロポーズがイヤでイヤで逃げたのではないかと日々
思えてならないので、真相を聞くべく探していたりする。

だって彼女は物凄く可愛い人なんだ。きっと別の誰かとつきあって
いるかもしれないじゃないか！！

そんなこんなで、オレは有給という名目を勝手に決め込み、その
まま彼女探しをしようと思います。

え？連絡？しないしない。

だって居場所がばれるじゃないか。

「か、海軍将校！？ヒェー！！！！なんでそんなひとがここに！！」

「は？え？」

「ひー！！ご、ごめんさい！！ま、まさかアルビダ様をつかまえに
！？ご、ごめんさい！ごめんなさい！！ぼ、ぼくはただのざつよ・

・ちがくて！えっとその！ボクはただ釣りに出ただけで・・・」

「あの・・・まあ、とりあえず落ち着いてください。

それより。まだ、オレ名乗っていませんよね？なぜオレの役職を知
っているのですか？」

「だって背中！！」

一人でムンムンと考え事に熱中していたら、突然悲鳴が聞こえて
コビー（仮）へと視線を戻すと、なにか小さな声でいいわけをし
ながらも、オレの服をさされた。

指された指の先は、オレの背中。

なにかあっただろうかと思って肩越しから見えた字に苦笑がこぼれる。

ああ、そういえば忘れてた。

オレってば、海軍本部をでたときの格好のままじゃん。

オレの海軍ルックは、主に和服。

というか、海軍将校になって『正義』を羽織るのは、まあ、しかたないと思っていた。

そこは気にもしなかったし、問題はなかった。

オレの正義は、昼寝。そして植物の栽培だ！

おひるねって気持ちがいいだろう？それを世界中のみんながやれば、みんなが幸せになれるし、寝ているのだから争うなんて芸当ができるはずもない。

ゆえにオレは自信を持って昼寝はすばらしいと宣言できる。

野菜に関しては、水遣りや成長の管理が大変であり、そのてまひまを考え、さらにできあがったあとの美味しさを考えれば――あれらを日々育てている農家さんともに、オレとしては野菜作りというのは誇っていいと思う。

それにこのまま農業スキルをあげれば、老後の隠居生活も夢ではないだろう。

なにより野菜には栄養がたっぷりあるのだ。

それは人々の健康管理へもつながる。

だからこそ、昼寝こそすばらしい世界平和への道であり、野菜こそ正義だと、オレは断言できる。

それがオレの正義だ。

だけどその正義コートのサイズがなかった。

オレが小柄なのもあるだろう。だけどSSでもでかすぎて……
・無理だった。

なので特注で頼むしかなくなり、そのときジャンパーでもなんでも

いいがどうする？といわれたので、気まぐれに和風な羽織を頼んだ。
できた羽織は、チラチラと青い蝶がなぜか三匹ほどとんでる絵柄
の入った真っ白な羽織。案の定、背には黒抜きで正義の文字。
その白地をみたとき心のそこから思ったよ。

誰だよ蝶々いれたの！ここは海軍らしくカモメだろ！！
むしろ無地でいいのにとつつこんだら、周囲の上官を含めた部下と
か海軍のお姉さま方がもったいないとか似合うとかなんかよくわか
らないことを言ってきたという・・・いわくありげの羽織だ。

どうもオレの周りにはおしゃれな奴が多いみたいだ。
まあ、たしかに作り直すのはもったいないのでそのまま愛用してい
る。

——それをすっかり目の前の桃色の眼鏡少年に、見られたようで
す。

さすがにこれから出会う人々が、海賊だろうと海軍だろうと一般
人だろうと、オレが《海軍少将のリース》だとは知られたくない。
面倒だ。

それになにより、オレは目立ちたくないのだ。

すでにずいぶんと平穏な人生からかけはなれてしまっているが、オ
レはオレの野望をまだ諦めてないのだから。

じいちゃんによる縁談騒動が終わったら、今度こそ引退デモしてゆ
っくりする場所を見つけよう。

だけどこのままでは、オレが海軍だと一発でばれてしまう。

オレは指摘してくれたコビー少年（仮）に例を述べ、海軍の証でも
ある“正義”の文字を消すべく、羽織を脱ぐ。

能力で文字を塗りつぶすのだ。

そのために羽織をバサリと、一回ほこりを払うようにふるう。

すると白だった羽織が、黒く染まり、青い蝶を残して“正義”の文
字まで塗りつぶされ見えなくなる。

「の、能力者!？」

「いや、手品です。手品ってことでよろしく願います」

たしかに羽織の色を変えたのはオレの能力によるもの。

いざというときのためにこの羽織にはいろいろ仕込んであるので、オレの能力を使用し“仕込み”を利用して服を染め上げたのだ。便利だよね。オレのビックリ能力。

でも能力者ってばれたくないので、羽織を着なおしたところで、海楼石をはめこんだ腕輪をしながら、剣（というか刀）も腰にさしなおして剣士で通すことにする。

髪の毛はどうしようかな。

さすがに染めたり本当の色を出すこともできるけど、黒のままでいいか。

ハイ、そんなわけで変装完了です。

さあ、どんどん爺ちゃんから逃げましょう!!

「あれ？」

・・・ところでルフィはどこだ？

それより、目の前の桃色少年は本当にだれだ？

「そういえば、どちら様ですか？」

ああ、うん。それ、今オレも思ったよ。

ルフィ
弟の気配を探してキョロキョロしていると、目の前のぼんやりとした桃色少年が口を開いた。

だれって・・・ここはあっさり名乗ったら、オレ、海軍に連行されないだろうか？

それとも偽名でいくべきか。

海軍には連絡しないでくれるといいんだけど・・・。

そう思って、思わず相手に懇願する気持ちでみつめていた。

眼鏡をかけてはいるが、オレの目にはほとんど形がうつらない。

なのでつい目を細めてしまい、睨むような形になってしまったが、そのままじいーーーーーとみつめる。

言わない？オレのこと通報しない？

睨んでいるようにでも見えたのだろう。

オレの無言の視線に堪えられなくなったように、たじろぎ、けれども何かを言おうとする桃色。

「あの・・・」

あ———っ！———！！

よく寝た———っ！———！！

「「え？」」

ふいに聞こえた大きな声。

それはなにやら酒蔵らしい小屋から聞こえ、オレとコビーは思わずそちらを振り返る。

瞬間、ドゴン！と派手な音がして、どこからか飛んできた金棒が、オレたちの背後にあった小屋を破壊した。

「・・・・・・・・」

「桃色君」

「あ、はい？」

「あそこにいなくてよかったですね」

その日、オレたちは、タルに入った人間が空を飛んでいくのをみた。

ってか、今のルフィじゃね？

63. 能力? そんなもん変装につかうにきまってるだろ (2/13) (後妻

お、おひさしぶりです (汗)

待っていてくれた方、メッセージをくれた皆様、心より感謝いたします。

ただいまリースの過去編を修正中です。

とりあえずは原作軸から徐々に・・・

早い更新は無理ですが、できるだけ頑張ります。
おそくてほんとうにごめんなさい。

6.4. 未来へ繋ぐ桃色の一步 (2/13)

とんでいったルフィらしき物体を追うため、嫌がる桃色少年の襟を掴んで森に向かった。

無理に踏み込む寸前、オレたちの背後――破壊された小屋のほうから何か怒鳴り散らすような女性の声が聞こえた気がしたが、あっちはあっちで勝手にすすめてもらおう。

たぶんアルビダ？だかアビルダ？だが、ロロノア・ゾロの話を部下達としているのだろうから。

それにしても・・・この世界は、“物語”の中ではないようだ。

人々は世界の中で呼吸して、脈を刻み、生きているのだから。

かくいうオレもその一人だが、オレの場合は異分子といってしまえばそのとおりの曖昧な存在だ。

オレが消えれば世界は、さだめられたシナリオどおりに進むのかもしれない。

けれど人々は生きているからこそ、己の感情によって考え動く。

そのせいか、記憶している限りの原作とは微妙にずれている。

現に目の前の桃色少年がコビーであるならば、ルフィのタルを拾うのは彼のはずだ。

コビーがまだルフィと会っていないのは、オレと話し込んだことで引き止めてしまっていたせい。

少しだけ 可笑しくなって

オレは 晒う 笑う わらう・・・

——世界はすこしならば修正がきくのかもしれないと・・・・・・
オレのその行為^{エゴ}をゆるしてもらえるのかもしれないと。

口端だけを持ち上げた薄い笑み。

運がいいことに、オレが桃色少年をひきずるような形で走っている
ので、彼にオレの笑いはみられなかったようだ。
なら、いい。

オレは雑誌の立読み派だったから、原作のすべてを知っているわけ
じゃない。

だからなにができるかなんてわからない。

けれど原作がある程度適用しているのなら——

ありがたい

ああ、神よ。今日ばかりはくそみたいなあんたでも感謝してもいい。

スベテハ

「オレの正義のため」

やってやるさ！
すべてを変える。

オレ色に。オレの好きなように。

そう――

逃げて逃げて逃げ切ってやろうじゃないか!!!

ハッハッハ!

オレの自由と平穩のためなら!!

そう、オレの薄れえない原作知識はきつとそのためにあるんだと思う。

神様、サイコー!

「あ、あそこです!」

「やれやれ。うちのこはどうやら無事の様子ですね」

ニマニマしそうになる顔を慌てて引き締め、桃色少年が示したほうへ向かう。

そこにはタルに下半身をはめたままのルフィが地面に転がっていた。ケガは・・・ないようですね。

血のにおいがしないことから、やはりルフィは頑丈だなと頷く。

コビーの服から手を離し、二人そろっていまだタルと格闘しているルフィに駆け寄る。

「あの!大丈夫ですか?ケガは?」

「ずいぶん吹き飛ばされましたねルフィ」

タルにはいったまま転がっているルフィに、駆け寄った桃色少年が心配そうに話しかける。

本当にいいこだなこの子。

この時代に他人の心配のできる子なんてそうはいない。
できれば部下にほしい。

・・・あ、いや。部下なんていらんない！いらんない！まてオレ。はやまるな！！

なにこの先も海軍でやってくみたいなこと考えてるのよオレっ！！
それにしてもなんでこんな子がこんなところにいたんだっけ？

オレが心の中でいろいろ考えていると、タルフィはいつものように軽く笑っていた。

たといえタルにはまっていようと笑顔の耐えない弟は、オレの（周囲のせいで）すさみきった心にはある意味癒しだった。

というか他人の振りをして、視線を反らしたくなっただけ・・・。

「はははは！」

「いや、笑い事ではありませんよルフィ（特にその格好とか）」

「そっかあ？」

「ええ」

「そ、それより、あ、あの・・・た、タルのひとはケガは？」

「ああ大丈夫。なんかびっくりしたけどな」

ニッシッシと笑うのは、相変わらず健在のようだ。

どんなときでも明るいその笑顔を見た桃色少年が、なんとも不思議そうな顔をしてオレを一瞥したあとルフィをみやる。

誰に聞くともなく、彼の口から漏れたのは疑問。

「あなたも海軍なんですか？」

ぜんぜんみえない。

そう、顔に書いてある。

普通に見えないとオレも思うわ。

ルフィなんかは涙まで浮かべて爆笑している。

ひー！腹いてー！！と騒ぎながら、もうリースばらしたのかー！とかこっちに笑う方向を変えてくる。

いやいや、それなにか誤解を招きそうですよ。

ばらしたわけじゃないし。それより今の発言だけ聞いてると、ルフィが海軍であることをオレが話したように聞こえるのはオレの錯覚か？

チラッと桃色少年をみると、やっぱり海兵なんだー！！とか、顔を青くして頭を抱えて悶絶してる。

「ひーっひっひー！あはははお前わらせるなあー！！」

「お、おふたりだけでなんでこんな島に！！」

「ルフィ。誤解がおさまってないんですが・・・増徴しているというかなんというか」

「あーわりわり。リースならともかくさ、なんかオレが海軍っておかしくて。あっはっは！！！！」

よく笑うな。

そこまでルフィが海軍であることはおかしいだろうか？

「・・・・・・」

想像してみて――戸惑いを隠せなくなった。

だって『ルフィが海軍』という言葉で連結されるのは、ルフィを海兵にしたがっていたじいちゃんの姿。

そうするとなぜか爺ちゃんが、鼻水をたらしながらウォンウォン泣きながら喜んでる姿が一番先に浮かんだ。

側にいるのは、いかつい海軍将校のコートを着て凛々しく「いつてきますお爺様」とかじいちゃんに旅立ちの挨拶をしているルフィ。きっと歯はキラリン☆と輝いていること間違いなし。

でも、たしかに。

似合わない。というかきもいな。

じいちゃんのようないかついコートの中身が、ベストに短パンに麦わらって・・・こどもが親の服を着て遊んでいるかのようだ。

いやいや。むしろこの場合はオレの想像力のなさを呪うべきだろう。もしかすると本当は似合うかもしれないし。

現に前世のTVCMかなにかでルフィが、黒スーツに黒いロングコートを着ていた光景を見た気がするが、あれは物凄く似合っていたはず。

でも白はちょっとな〜。

「お前おもしろいな〜オレはルフィ。海賊だ」

「あ、そうなんですか。どうりで海兵には見えな・・・って!? ええ!? じゃ、じゃあ、こっちのひとは!? え? ええええー!!!」
「!!!? (いみわかんないですけど!?)」

「ん? リースは違うぞ」

桃色少年のツッコミが楽しいな〜と、年長者としてニコニコと二人の話を聞いていたが、なにいつてんだこいつ? みたいな顔で真実をさらっと述べようとするルフィにギョツとする。

こいつ。オレがどれだけ海軍が嫌いなのを言い聞かせて育てたと思っっているんだ!?

ルフィは海軍の仲間と思われてもいいのか!?

それより、こういう場合は“海軍将校から奪った服”ぐらいのウソをつけ!!

オレの身の安全を考えろ。

っと、いうか、言うな!言うな!!言うんじゃねー!!!!

「リースは海軍少将だぞ」

こんのっあほがー!!!!

はつきりと言いやがったし!!!!

しかも階位まで!?!なぜお前が知っている!?!新聞もみなそうなお前がなぜ!?!

「言うんじゃねーって言ってんだろぅがあっ!!!!」

思わずじいちゃん直伝の拳でもってルフィをぶん殴っていた。

ドコン!ガッシャーと音がしてタルが粉碎され、「いてっ」とルフィがうめくが、オレの怒りは収まらない。

そんな軽い「いて」程度ですむのはお前の悪魔の実の能力ゆえ。

そのゴムの能力が、にくくてにくくてたまらない。

いっそのこと悪魔の実だけ抜き取ってやろうか?

いや、それだけはだめだ。まだ実験段階のこの能力を使ったら、ルフィも死んでしまうかもしれないし。

でも、いっそもっと痛みがあればいいのと思うオレはわるくない。ゴムなんて嫌いだ!!!

「おまあええー!!!!何度言ったらわかるんだよこのアホゴムが!

！オレは海軍なんか嫌いだといってるだろうが！！

知らないひとから物をもらうのについていくのはだめだと、何度も言い聞かせたよなあ？知らない人に話しかけられたら無視しろって教えたよなあ！？なんでこの素性も分からない桃色少年にオレのこと言っちゃってるんですかね。どの口がオレのことしゃべってくれたのかなあ？ええ？どうよルフィくんよお。ってか、こっちは海軍本部から逃げてきたんだよ！真っ正直に人様の素性をばらすんじゃないよー！！ジジイのところに連れ戻されるだろうが！！」

「アッハッハ。やっぱリースうけるわ」

「笑うところはそこじゃねーよ！！！！」

ゴスッ

「いってー！！」

「いたくて結構だ！！これ以上オレのことを口外してみろ！その口、しゃべれなくなるまで肉はやらん！！」

「！！り、リース様それだけはごかんべんを！！」

「名乗るなら自分だけにしろ！！」

「ははー」

「・・・・・・・・」

オレのきれっぷりを笑うルフィは、オレが食べ物のお話をしたとたん地面にひれ伏して土下座をしてきた。オレは悪代官かなにかか！？しまいにはオレにすがりつき、涙目になって「それだけは」とないている。

本当にこいつは食料のことしか頭にないのか？

たしかにオレは短気だ。

切れると心の声そのまま口に出るので口も悪くなるし。

その差にビクリさせてしまったか、呆然としている桃色少年。
肉。オレの肉がぁと悲痛な顔をしている弟。^{ルフイ}

なんともいいがたい雰囲気の二人を見て、なんだか一気につかれた。

「はぁ。しかたありません。今日はもういいです。
で・す・がっ!!」

いいですか二人とも、オレのことは口外無用です。絶対に言わない
ください。いいですね? とくにルフイ」

「りよ、りようかい!」

「は、はぁ・・・あ、えっとわかりました」

まったくなんで逃亡早々にこんなやつかいなことになってるんだ?
初っ端からオレが海軍であることがばれるなんて・・・。

やっぱりルフイと旅するのは止めに切り上げたほうがいい気がする。

そこでふと、オレをみてダラダラと脂汗だか冷や汗を流して直立
不動のままの桃色少年に目をやり、首をかしげる。
そういえば――

森にタルごとふつとんだルフイを探すさいに、思わず横にいたか
らつい連れてきちゃったけど・・・この子、だれ?

「そういえばお前、だれだ?」

ルフイもオレと同じ疑問に到達したようで、桃色少年に不思議そう
に首をかしげた。

あー、また指差して。

ひとに指をさしちやいけませんと何度も教えたのに。

けどそこで、そういえば名乗ってませんでしたねと、汗をぬぐいつつ桃色少年は「コビー」と名乗った。

やはり彼は“コビー”で間違いなかったようだ。

「この海岸は海賊『金棒のアルビダ』様の休息地です」

「なるほど。渦があつてたやすく人は近づけないから、海賊の拠点としては最適と・・・」

「え、ええ。リースさんの言うとおりです。」

ぼくはその海賊船の雑用をしています」

「・・・忘れていたようなので念のため言っておきますが、オレはこれでも海兵ですがよいのですか？そのようなことをオレのいるところで言ってしまうって」

「ハッ！！そ、そういえば！？」

「シッシッ。気にすんなってコビー。海軍から逃げてるリースが、海軍に連絡とれるわけないって。いつも電話からさえ逃げてたくらいだしさ」

「この子はどうしてそういう変なところには頭が働くというか覚えてるんですかね。」

ですが、ええ、そのとおりです。むしろオレの方が通報されやすいので、できれば海軍との接触は避けたいのですよ」

「は、はあ・・・そうなんですか」

「それでさ。この島に小船とかねエかな。おれのやつ渦巻きにのまれちゃってさ」

「ああ、あの。リースさんの言ってたことは本当だったんですねえ」

「あーあれはびっくりしたよ、まじで」

「ふつう死ぬんですけどね・・・ましてやタルなんて。」

あ、えっと、こ、小船ならぬ事もないですが・・・」

思わずコビーの言葉に共感し、激しく首を「うんうん」と縦に振る。うん。オレも能力者じゃなかったら、あの渦巻きで死んでいた自信がある。

ぶっちゃけタルにルフィを詰め込んだのはオレだ。

だけど咄嗟のことすぎて頭が回らなかっただけで、今おもえば、タルの中でよくルフィは生きていられたものだと関心さえしてしまう。しかもタルはどこも壊れず、無事にこの岸まで漂着したし。

なんであのタル、渦に見込まれても平気だったんだろう？

さすがは天性の強運というところだろうか。

ルフィの要求に、すぐに案内されたのは、手作り感あふれる小船のもと。

同じ森の中に隠してあったのは、組み立てるための材料である木材を手に入れやすかったためだろうが、どうやって海に運ぶつもりだったのかは少し気になる。

それになによりこの船がルフィの飛ばされた森と同じ森の中にあつたことは運がよかったとも言える。

なにせ移動の際にアルビダにみつかる危険が下がったのだからよしとしよう。

実はルフィには、オレが能力者であることは教えていない。

なのでこの船を乗れるくらいまともな船にすることぐらいオレの能力なら可能だが・・・まあ、様子見といこうか。

こんなところで甘えさせては、この先ルフィが強くないし。なにより“あいつ”を助けにいくなんてできないからな。

「棺桶か？」

ああ、なんてこと。

ボロ〜ンと効果音がしそうな小船を前に、ルフィのなんと正直な
こと。

もう少しオブラートにしようよ。

お兄ちゃん、空気の読めない君に胸がいたいよ。

あまりのことにホロリと涙が出かけた。

ほら。コビーなんか困ったように苦笑いしているし。

「い、一応・・・船です。ぼくが造った船です・・・！二年かかっ
てコツコツと・・・」

「二年・・・ですか」

「二年かけて？で・・・いらねエの？」

あれ？この二年ってなんだ？

原作を読んでいたとはいえ、オレってば始めの頃はかなりふつとば
して読んでいたからなあ。

「この船はここからにげだしたくて造ったんですが、結局、ぼくには
そんな勇気がないし・・・どうせ一生雑用のうんめ・・・ゴフツ」

「うわー。リース、なにやってんだよ」

「いや、ちよつとむかついたものでつい」

一生雑用の運命。だからもうこの船はいらない。そう吐き出され
ようとした言葉に、無性に腹が立った。

そのまま逃げるためにきたえた足の速さ（『剃』ではない）で、コビーの背後へと周り、チョップを脳天から食らわしていた。オレが小柄とはいえ、まだルフィよりも背が低いコビーにだから脳天からなんてまねができたのだ。

「い、いたいですリースさん」

「なんのことでしょうか？そしてぜひ今のあなたの発言、および今のオレの行動はお忘れくださいな。むしろ忘れなさい。

さあさあ、なにをしているのです？続きをどうぞ☆」

「え？」

なんだそれは？と思った。

運命ってなんだ？

流されて逃げられないこと？そうだというのなら、オレが海軍にはいったのも運命か？

それは無理やり海軍にはいらされ、海軍でしごかれたオレにもあてはまる。そしてそのままオレは一生、死ぬまで海軍でいないといけないということか！？

そんな「運命」なんて、たかが二文字の言葉じゃないか。

それごときで未来が閉ざされてしまうだと？

断固断る。

絶対いやだ。

いつか必ず逃げ出すんだと、日々、虎視眈々と隙を狙っているオレに今の【未来真っ暗絶望説】は不快極まりなく、常に逃げようと戦略を練っているオレに失礼だと思う。

だからチョップしたのを謝る気なんてない。

むしろお前の言葉を取り消せといいたくなる。が、そこは年上者として抑えた。

ルフィはオレの爽やかな営業スマイルに頷いている。

理解力のある弟は好きだ。

「人が思うより人生とは短いものです。その人生を運命なんて言葉で片付けるものではありません」

オレは前世の記憶がある。

人間一生六十年と生きていたいたが、オレの前世はあっけなく十台半ばで終わったのだ。

それにオレはこの世界で、たくさんの死をみてきた。

オレより若く死んでいった子供たちも山のように見た。

長く見えるようで人生は短い。

それをたった一つの“運命”なんて言葉ごときで、すべてを決めてしまうのは、悔しいじゃないか。

せめて希望ゆめを持てば、少しは変わるだろうが――。

「コビー、あなたはやりたいことはないのですか？オレは叶えたい野望があります。その名も【生きて生きて生き抜いて、広大な家庭菜園を作って穏やかに暮らすぜこのヤロウ計画】です！そのためならこうして日々海軍から逃げるくらい厭いません。さらにいうと現在進行形でその恐怖の鬼ごっこの真っ最中ですし。

なんでしたらオレが海軍から逃げ切る方法をお教えいたしますが？」

「い、一応・・・本当はやりたい事もあるんですけど」

「じゃ逃げればいいじゃねエか。この船でさ」

「ム・・・ムリムリ！！もしアルビダ様にみつかったらって考える
と足がすくんで……！！怖くてとても……………！！」

物凄い速度で首をブンブンブンと横に振るコビー。

なんて速度だ。

鳩が首をガクンガクンゆらすあれよりも激しく……。
よく酔わないものだ。

そしてコビーは海賊船の雑用になる経緯を話してくれた。

釣りに行こうとして間違っって海賊船になっって逃げられなくなっったとか。

それを聞き、なんかこいつオレに似てるなあとか思い、同情だがよくわからない涙がオレの目からは滝のように流れた。

おかげで眼鏡はくもり完全に役立たずとなった。

そんなオレにギョツとするコビーからハンカチをもらったので、ありがたく受け取って涙を拭きつつ眼鏡のくもりをぬぐう。

ルフィはオレの突然の涙にもなれているせいで気にもせず、むしろコビーに「根性なさそうだしなー」とか「お前キライだ」発言までしている。

ルフィのさわやかな発言（本心ともいう）に、コビーのダメージははかりしれないようで、こちらも泣きながらズモーンとおちこんでいる。

「でも・・・その通りです。ぼくにもタルで海を漂流するぐらいの度胸があれば・・・」

いやいやいや！そこは度胸じゃなくて無謀ってやつだから！！しかもそれって、オレのミスだ。

横にあったからその中身を抜いて、とっさにルフィを詰め込んだだけ。

そのせいでルフィは“タルフィ”となっただけで・・・間違ってるよその考えは！！

オレだっってタルに入れられて渦巻きに飲まれたら死ぬからね！！渦巻きがなくても、タルで漂流したらふつうは死ぬからね！！

とっさにコビーの会話につっこみをいれようとしたが、すでに話はどうつっていて、ルフィがなぜ海にでたのかを聞いていたので、オレはそのタルに関する誤解を解くことはできなかった。

コビーの言葉にルフィは笑う。

「おれはさ・・・」

海賊王になるんだ!!!

にいと浮かべた笑顔が、一、二度しかみたことないはずの・・・
なつかしい誰かを思いおこす。

その言葉に、遠い昔の約束が脳裏をよぎる。

聞こえるのは海の音。
波が岩に打ち付ける音。
そして――

『ガープ。なんだそれは？』

オレハアタタカイウデノナカ
アナタハツメタイクサリトカベノナカ

ソコは—— ふかい

深い、深い、フカイふかい・・・ウミノソコ・・・

『ちっせえーなあ』

オボエテ イマスカ——
オレハアナタヘチイサナ コノ手ヲ ノバシタ

『なんだあ？ああ、おめえは・・・』

『はは。今更だがおめえの名前少しもらったぜえ』

『寝るな寝るな。聞いてるんだろう？』

『あいつもお前みたいに賢い子になるぜ。はは、だがあおめえはちよいとばかり規格外すぎるか』

『お前。俺の言ってることわかってるんだろう？なら——』

頼むぜえリース。 あいつを・・・

——お願いねリース君・・・

蘇える記憶に飲み込まれ、そのまま次第に潮騒の音が、“あのとき”の雨音に聞こえてくる。

「痛いっ!!!」

ふいにガツーンと、そしてコビーの悲鳴のような大きな声で、水泡のような幻聴が掻き消える。

パチンとはじけるようにオレは、現実に戻された。

「ど・・・どうして殴るんですか!!」

「なんとなくだ!!」

ドドーンと胸を張って告げるそのルフィの姿は、まさにいま相手を殴り飛ばしましたといわんばかりの体制だった。

おいおい。なんだかしらんが、おまえなにしちゃってんのよ。

どうかした?と視線で問うと、少しかだけ不機嫌そうにルフィは「こいつムリムリしか言わねえんだもんよ」と教えてくれた。

ああ、なるほど。

そういえばルフィは海賊王になるとばかり昔からいっていた。

それがこのルフィという人物のすべてであり夢だ。
それを全面否定されれば、そりゃあ、殴りたくなるというもの。
ってか、それってまさにさっきのオレだよね。

夢を否定される。

夢をみることをやめる。

だけどこの世界ではそれもしかたないこと。

こんな時代だから余計に・・・。

でも

それは生きることを止めたということ。

だからオレはそんな考えが嫌いだ。

ルフィは違う意味で、夢を諦めることがキライだ。

オレはルフィでもシロヒゲでもゾロでもない。

背に傷をおおうとも、どんな惨めな姿をさらそうとも、オレはなに
があっても生き続けたい。

逆にルフィは

「おれは死んでもいいんだ！」

「え？」

「・・・・・・」

ここがオレとルフィの違い。

夢を諦めないことへの考え方の違い。

だからあの子は、海賊という道を選んだ。

死ねないと思うオレは、決して“あるべき海賊”にはなれないだろう。

「おれがなるって決めたんだから、そのために戦って死ぬんなら別にいい」

「!!」

シャンクスとの誓いの帽子をかかげるルフィの決意はゆるぎない。それに息を呑むコビーからは、「し、死んでもいい・・・!？」と驚愕の眩きがもれる。

ルフィは相変わらずコビーの心中など気づきもせず、その態度はのんびりしたものだ。

それがひとびとの核心に迫る言葉であろうと、本人だけが気付かない。

「やれそうな気がするんだけどなあ。やっぱ難しいのか？」

のんびり語るルフィとは対照的に、みひらいたコビーの目からは涙がポロポロとあふれ出ている。

その目は先ほどまでの死んだようなそれではなく。

未来あしたを見つけた者の強い輝きを乗せていた。

「・・・ぼくにも・・・」

「？」

「・・・やれるでしょうか・・・!! し、死ぬ気な

ら．．．．．」

「ん？なにがだ？」

「ぼくでも．．．海軍にはいれるでしょうか．．．！！！！」

時代^{みらい}への風が吹く――

強い声に。

はからずもオレは笑みを浮かべていた。

——ねえ、きこえた？

“あなた”とは違う経路で、未来^{ミチ}を選び取った少年がここにいる。
やがて新しき風と向かい合うだろう、若い蕾が・・・

やつと 芽吹いたんです

ゆらり ゆらり ゆらゆらと

漣にゆられ

潮騒の音は何処かの蒼へと届くのだろう

64. 未来へ繋ぐ桃色の一步 (2/13) (後書き)

原作で4ページくらいのシーンが、異常に長くなった。
一話が長いね本当に。
それでもまだアルビダ編が終わらないorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5218m/>

ONE PIECE ～地味にひそかにおだやかに・改～

2011年6月29日19時23分発行